

【 検 査 】

1 3 7 20 歳以上の屈折異常に対する初診時の精密眼圧測定の算定について

《令和 6 年 4 月 3 0 日》

《令和 8 年 5 月 2 9 日更新》

○ 取扱い

20 歳以上の屈折異常（近視・遠視・混合乱視・近視性乱視・遠視性乱視）に対して、初診時の D 264 精密眼圧測定の算定は原則として認められる。

○ 取扱いを作成した根拠等

精密眼圧測定は、眼内圧を測定する検査である。緑内障（原発開放隅角緑内障・原発閉塞隅角緑内障）の患者で高眼圧が認められ、ステロイド点眼薬を投与している患者でも高眼圧が認められることがあるが、屈折異常と高眼圧との直接的な因果関係は乏しい。

しかしながら、緑内障は成人の失明原因の第一位であり、緑内障の発症頻度は加齢とともに上昇し、40 歳以上では 5 % 程度とされていることより、屈折異常の初診時において、患者の視力異常や症状の鑑別診断のために眼圧を測定することは、医学的に妥当と思われる。

以上のことから、成人については、屈折異常のみであっても、初診時の D 264 精密眼圧測定の算定は原則として認められると判断した。

なお、20 歳未満の患者に対する当該検査の算定については個々の症例ごとに判断すること。